

日英語の動詞形態構造の比較

——日本語学習の視点から——

長 沢 朋 也

1. 序 論

1.1 導 入

我々日本人は、外国人が我々の言語（日本語）を使用するのを耳にして、当然のことながらしばしば違和感を感じずにはいられない。このような感覚は、何も我々日本人だけに特有のものではなく、自らの母語が完全な接近（approximation）を受けずに話されるのを耳にすれば、どんな言語の話者であっても少なからず持ちうるものであろう。音声的な違和感もさることながら、助詞・助語（particles, adjuncts）、接辞（affixes）、屈折辞（inflections）、接語（clitics）といった統語論・文構造において重要な役割を果たす要素のミスを、種々、多々、構造的・形式的に認めざるを得ない。さらに、分節音、形態（素）、文レベルを越えて（あるいはその形式面に対して実質面に入って）、意味、談話、運用面において、それまでのレベルにおける誤用の蓄積の結果、上位レベルへと向かうに従って、誤用の拡がりが増えてくることであろう。音声的なレベルでの接近の度合を高める際には、生理的、感覚的、認知的・認識論的（cognitive ; epistemological）な問題（例えば、調音の仕方、それによる分節の仕方、また音の知覚の問題など）が複雑に絡み合ってくるので、音声レベルは、言語の様々な機構

(レベル)における様々な方面に、影響していると考えられる。(音の捉え方、音の分節の仕方は、スムーズな文レベルへの接近に際し、意味との関係とも絡んで非常に重要なレベルであると考えられる。例えば Firth はその独自のプロソディックな音韻論を提唱して、意味(あるいは場の脈絡)と音との関係を論じた。)我々日本人と比べて、アメリカ人は少くともその英語(アメリカ英語)に外国人が適正に接近できていなくてもそれほど違和感を覚えずに(無意識のうちに大いに感じているかもしれないが)容認してくれるといわれる。しかし日本人の場合は、いわゆるカタコトの日本語を話す人間(外国人=“ガイジン”)には非常に高い度合で、あるいは極度に、その日本語に対して違和感を認める。こうした日本人自身による日本語に対する態度は、日本人の精神にかなり深く根付いているものと思われ、たとえその“ガイジン”の発音が、日本語の正確な音声構造上の分布に即して発せられていても、日本人にとってこの違和感はなかなか拭い去ることはできないように思われる。(例えば、音韻論的に同一音素としてまとめられうる閉鎖音と鼻音の/g/をきちんと発音し分けている場合などでも、である。しかしその一方では、分節音の調音にとらわれていて、日本語の音声の特徴づける高低アクセント(pitch accent)に対して、例えば英語、ドイツ語、スペイン語のような強弱アクセント(stress accent)を持ち込んだり(transfer)している。筆者が観察した例では、“wakarānai (I don't know (understand))”[. ˈ ˈ . .], “airurandō-jin desu (I am Irish)”[. ˈ ˈ ˈ ˈ ˈ ˈ]のような発話のアクセントを、*‘wakaranāi’[... ˈ .], *‘airurandōjindesu’[... ˈ . .]というように、明らかに音の高低(pitch)を意識しない、強勢(stress)のみを意識したアクセントの据え置きを転移させた状態の発話をしていた。そのような場合には明らかに違和感を与える。)また日本人の場合、例えば特に、いわゆる「紅毛碧眼」である白色人種に対して、その“ガイジン”が流暢な日本語を話す場合にはなおさら違和感を覚えてしまうというジレンマが生じる。つまり外国人に日本語が容易に習熟できるわけがないという、いわば逆説的な、無意識のうちに生じ

る感覚である。ここに日本人の日本語に対する特異な、神経質なまでに敏感な言語の認識感覚が露呈されている思いがするのである。人種の容姿に対する偏見に加えて、他言語の特質的な音体系（中舌母音，変母音（umlaut: [œ], [ü]），流音（[l], [r]）の区別，帯気音（aspirants: [p^h], [t^h], [k^h]），閉鎖音，摩擦音など様々な obstruents の子音群等，日本語の音体系と異なる調音の仕方を持つ音）を基層として話される日本語の音声に対して日本人が敏感に反応してしまうということであるが，こうした事実は日本人あるいは日本語の歴史的・社会的な閉鎖性と深く関わっている。このような音声的な“違和感”の問題は別として，意味を持つ形態素レベル以上での形式的な“違和感”の問題について，本論では主として追求していく。またここで取り上げる形式的な問題は，外国人が日本語を学習していく際の構造的，体系的，機能的な言語形式の問題として取り扱う。

ここで少し，例えば英語と，日本語の背景をなすそれぞれの歴史的・社会的背景について考えてみたい。英語圏はその領土を拡大し，英語という言語を様々な地域に普及させてきた。このような英語に関する世界史的特質，あるいは言語史上における特質は，日本語の歴史的観点からすればかなり異質の，特異性といえることができるであろう。その言語圏が世界のあらゆる地域に拡大されることによって，英語は歴史的に世界的規模（world-wide）のいわゆる“普遍的（universal）”な性格を帯びることになった。しかし英語を普及させていく過程において，語圏内の様々な地域で種々の複雑な社会言語学的な問題，言語の構造的な問題をもたらしたことであろう。いわゆるピジン＝クレオール化現象などの言語現象が英語圏の様々な地域で認められる。一方，日本語に関していえば，かなり長い間言われ続けていることであるが，日本は四方海に囲まれている島国で外国からほとんど侵略されてことなく内側の文化を作り上げてきた。また江戸時代において取られた，二百年以上にも及ぶ鎖国政策もその要因の一つである。そのため近代 19 世紀後半に至るまで外国人（主に西洋人のこと）は日本の社会に溶け込むことなく（或いは溶け込まれることなく），日本の内

部には英語圏とは極めて対照的な独特の単一言語社会が形成されてきた。異なる言語を耳にしようものなら、たちまち違和感や抵抗感を覚えてしまう。その言語が理解できないから身構えてしまうということではなくして、ただ単に聞き慣れない言葉であるという理由から壁を作ってしまうのである。このことは何もカタコトの日本語（外国人の話す）に対してのみ持たれるのではない。日本語の中の各方言間のコミュニケーションにおいてもなされうる。これを具体的に、また皮肉にも示している場面に筆者は出食わしたことがある。標準語（東京方言）から見れば“なまっている”東北地方の方言の一つである秋田方言の南部、仙北地方の方言（※筆者の母語：後に標準日本語の分析との対比で取り上げる）圏（面積：2022.67 km²）の中でさらに狭い、“微妙な”言語圏を形成し接していると思われる区域（大曲市（107 km²）西根地区及び西仙北町（167.02 km²）土川地区：両地区の直線距離約 10～15 km）において、それぞれの地区の人間が互いの言語のことを“なまっている”とのしり合っているのを目の当たりにしたことがある。このような日本語における内部事情に比して、英語圏は類稀な、広大な拡がりを見せたように思われる。だがそうした一方で、英語圏でのコミュニケーションにおける対人関係は、逆に単純化されていったのではないか。反対に日本語の場合、島国という閉鎖的な地理的条件や単一言語、単一民族という言語学的、民族学的条件により、コミュニケーションは一種の、“狭い環境の中での複雑性”を帯びることとなったのではないかと思われる。こうした社会言語学的、言語地理学的事実からしてみても、いかに（況んや外国人の日本語が、たとえそれがどんなに流暢なものであれ）日本語の社会において“異質性”（idiosyncrasy）ということが、抵抗感・違和感のキーワードとなりうるかが想像されることと思う。にもかかわらず、これから本論で展開しようとすることは、日本語教育・日本語学習の視点から、幾分でも外国人が学習・習得した成果を（つまり日本語を）使用するに際して、日本人に対して抱かせる、あるいは日本の言語社会に対して与える、その使用するところの日本語の違和感・抵抗感

を幾分でも軽減させることができればとの考えから、主として日本語の構造面からの問題点を提示し、その分析を試みようとするものである。

1.2 研究分析の理論的要請

1.2.1 本論で分析の対象となる日本語の形式は、いわゆる GB 理論的なアプローチによる核文法 (core grammar) 的文法体系によって明らかにされうるような形式というよりは、運用面 (pragmatics あるいは performance) において、つまり口語体において、ともすれば周辺的で有標であるとも考えられうる形式をも取り込んだ、広範にわたる自然な言語事実の認識による理想的な運用論の追求の一環であるといってもいいかもしれない。“一環”であるとするのは、口語体形式とはいってもその範囲はあまりにも広いので、取り上げるのはその中の一部であるからである。Chomsky の言語能力 (competence) と言語運用 (performance) の区別に比せられる Saussure の社会的言語体系 (langue) と個人的発話 (parole) の二分法 (dichotomy) による、一言語社会に陰在的に内在する言語体系があると仮定できるからこそ明示的な個人の発話が存在する (あるいは表出可能となる)、とする考え方が、再びアメリカの言語学界において認識されつつあるという (伊藤教授による私信)。いうまでもなく、Saussure によれば言語学の真の研究対象となりうるのは社会規範としての言語体系であるところの langue であるが、Saussure 直系のいわゆるジュネーヴ学派の直弟子 Bally, さらにその弟子、つまり Saussure のいわば孫弟子に相当する Frei らによって、実際の端的な言語事実であるところの個々人の発話 parole も研究対象にすべきであるとする一種の反論が起こる：

… ; seul le parler individuel peut vraiment révéler les rapports entre la pensée et le langage. Le linguiste ne devrait donc négliger aucune occasion de noter … les formes caractéristiques de son parler in-

dividuel. pour mieux se rendre compte des faits de pensée qui déterminent, dans chaque cas, le choix ou la création des expressions qu'il emploie spontanément.

(Bally 1935 2nd ed. p. 45) ⁽¹⁾

… dès que l'on considère la langue comme un instrument agencé en vue de fins données, la conception saussurienne devient trop étroite. … la linguistique fonctionnelle a pour unique et véritable objet le langage, envisagé comme un système de procédés qui est organisé en vue des besoins qu'il doit satisfaire.

(Frei 1929 p. 39) ⁽²⁾

こうした意見は Saussure に影響された人間ならば一応誰しものが示しうる反論であり、現在の Chomsky 理論に対する語用論 (pragmatics)、談話分析 (discourse analysis) に相当するといえよう。完全に解明されうるものであるかどうかは分からないが、体系があるからこそ個々人の parole ないしは performance によってコミュニケーションが可能となる。仮に有限個の文 (“有限個” とはいえおびただしい数の文) からなる言語があったとしても、例えば Chomsky によれば有限個の文法体系によって無限の文を作り出すのであるが、その有限の数の文の中にさえ体系が認められるならば立派に研究対象となりうる (橋本 1981)。つまり個々の発話が立派に言語として通用するからには、それらには何らかの体系が与えられており、したがって具体的な発話の形式の解明が、はからずも体系の解明に光を投げかけることとなるのである。

1.2.2 我々が具体的に平素に用いている言語形式は平素に用いられるが故に正しくないものではなく、言語の自然な姿として認められるべきである。それに対し、Chomsky の生成文法理論の分析対象とされるような文は決して平素に用いられる形式のそれではない。いわゆる周辺的で不純な部分

をそぎ落した理想的な文の統語関係を解明するのがその目的であるが、そうした文は我々の日常会話においても（場面はどうであれ、例えば近所付き合いでもオフィスでも、幾分フォーマルなシチュエーションにおいても）発しているとは思われない。例えば Kuno (1973) は、次のような例文を挙げて分析している。日本語の助詞 'wa (topic case particle)' と 'ga (nominative case particle)' の分析に関して：(p. 53)

- (1) (i) a. John ga sinda. (neutral description)

died

'John died'

- b. Dare ga sinda ka? John ga sinda. (exhaustive listing)

who died died

'Who died? It is John who died.' (That is, John and only John died.)

- (ii) a. Sora ga aoi. (neutral description)

sky blue

'Look! The sky is blue.'

- b. Sora ga aoi. (exhaustive listing)

'It is the sky that is blue.'

- (iii) a. John ga kita. (neutral description)

'John came.'

- b. John ga kita. (exhaustive listing)

'It was John who came.'

- (iv) a. *Saru ga ningen no senzo desu. (neutral description)

monkey man 's ancestor is

‘Look! A monkey is the ancestor of mankind.’

b. Saru ga ningen no senzo desu. (exhaustive listing)

‘It is the monkey that is the ancestor of mankind.’

(v) a. *Tokyo ga ookii. (neutral description)

big

‘Look! Tokyo is big.’

b. Tokyo ga ookii. (exhaustive listing)

‘It is Tokyo that is big.’

(vi) a. *John ga nihongo ga dekiru. (neutral description)

Japanese can

‘John can speak Japanese.’

b. John ga nihongo ga dekiru. (exhaustive listing)

‘John (and only John) can speak Japanese.’

このように kuno は ‘ga’ の用法に関してプロソディーと関連させて ‘exhaustive’, ‘neutral’ の区別を設けている。アステリスクの付いた ‘neutral’ の場合の表現は主題 (topic) マーカーの助詞 ‘wa’ を用いた場合が適格である:

(2) (iv a’) Saru wa ningen no senzo desu (neutral)

TOP

(v a’) Tokyo wa ookii (neutral)

TOP

(vi a’) John wa nihongo ga dekiru (neutral)

TOP

しかし (1 iv), (1 v), (1 vi) には次のような反例が存在する:

- (3) (1 iv)' Saru ga ningen no senzo dearu koto (neutral)
 is(lit.) fact
 'the fact that monkey is the ancestor of mankind'
 (1 iv)" *Saru wa ningen no senzo dearu koto
 is(lit) fact
 ※ lit.=literary
- (1 v)' Tokyo ga ookii koto (neutral)
 fact
 'the fact that Tokyo is big'
 (1 v)" *Tokyo wa ookii koto
 fact
- (1 vi)' John ga nihongo ga dekiru koto (neutral)
 fact
 'the fact that John can speak Japanese'
 (1 vi)" *John wa nihongo ga dekiru koto
 fact

(1 iv a), (1 v a), (1 vi a) の形式は、プロソディーが neutral の場合、名詞句化 (nominalization) を示す助詞 'ga' を用いた文が不適格になるというものであるが、neutral の、つまり主題化 (topicalization) を形成する助詞 'wa' は (3) の反例で示したように、名詞句化を形成する関係節において用いられるときには neutral であっても適格とはならない。したがって、果してこのような単純な割り振りの分析方法が日本語の自然な文構造の適格性を問うものとして、あるいは理解を促すものとしてふさわしいかどうか疑問である。さらにこうした方法論は言語の論理性 (logic) を念頭に置いているものであるから (しかもその論理性云々というのは西洋式の論理性に当てはめていると考えられる。) 印欧語流の照応形 (ana-

phora) 等の明示的な形式の発達していない日本語に対して、無理に西洋式の論理性を見い出そうとすることには甚だ困難が多いと思われる。また Miyagawa (1989: Ch. 2) は日本語の類別詞 (numeral quantifier: NQ) を用いた文の統辞構造 (叙述における類別詞とそれが係る名詞句との統御 (control) 関係) である “scrambling” に関してその定式化をある程度成功させているように思われるが、いくつかの不適格文については疑問がある:

(4)

*[_s3-satu_i[_sTaroo ga [_sHanako ga hon o t_i katta to] omotte iru]]
 3-CL NOM NOM book ACC bought COMP think
 ‘Three_i, Taro thinks that Hanako bought (t_i) books.’

上の文は NQ が二つの s の境界を越えていて下接 (subjacency) の条件に抵触するというものであるが、このような語順の文は口語においては頻繁に用いられているように思われる。それらは言い誤りや心理的に逸脱した周辺的な発話ではないかという反論がなされるかもしれない。生成理論の手法は直感を重視する。その直感によって文の構造においても核となる文法能力を働かせることによって文の適格性を、言語を話す人間ならば瞬断できるといわれる。しかしながら、意味を伝える項 (argument) と付加詞 (adjunct) の形式が揃っていれば、上の文に見られるような語順によっても普通に口語においては完全にコミュニケーションできるように思われる。言語学習においてはこうした点が重視されなければならない。特に日本語のような膠着型の言語の学習においては、定型表現等の形式以外はある程度の語順自由な形式が容認されなければならないように思われる。Miyagawa が追求するような “scrambling” に関して、適格な統辞構造を導くために変形をサイクルさせて、口語において容認できる文の範囲を演繹してみる:

(5)

a. [Taroo ga [_{CP}3-satu Hanako ga hon o t katta to] omotte iru]

a'. [Taroo ga[3-satu [Hanako ga hon o t katta to]] omotte iru]

↓

b. [Taroo ga[_{CP}Hanako ga 3-satu hon o t katta to]omotte iru]

b'. [Taroo ga[Hanako ga[3-satu hon o t katta to]]omotte iru]

↓

c. [Taroo ga[_{CP}Hanako ga hon o 3-satu t katta to]omotte iru]

c'. [Taroo ga[Hanako ga hon o[3-satu t katta to]]omotte iru]

↓

但し、NQ が COMP の枠外を右側に出ると、日本語の左枝分かれ構造のためたちまち容認度が低くなる：

d. *[Taroo ga[_{CP}Hanako ga hon o t katta to]3-satu omotte iru]

d'. ?*[Taroo ga[[Hanako ga hon o t katta to]3-satu]omotte iru]

↓

e. ?*[Taroo ga[_{CP}Hanako ga hon o t katta to]omotte iru 3-satu]

e'. ?[[Taroo ga[Hanako ga hon o t katta to]omotte iru]3-satu]

生成理論においては CP の中に境界 (boundary) (‘[’あるいは‘]’) を設けるかどうか、あるいはどこに設けるかによって解釈が変わってこよう。しかし ‘t’ などの空範疇や、統率や束縛の関係などに関連のある節の境界を考慮しない場合、すなわち発話の際の表面上の形式の配列（もちろん音調 (tone) や音のレジスターも関係してこようが）を念頭に入れた場合、例えば d. は ‘3-satu’ が主節におかれているので全く不適格であるが、e., e'. の場合は、統語関係の厳密な設定を行おうとする生成理論からすれば

完全に逸脱した文ということになるだろうが、付加的に具体的な冊数が類別詞 (NQ) の接語 (clitics: CL⁽³⁾) に添えられているので、論理的には意味を伝えているように思われる。このように、言ってみれば“忘れないように”具体的な数を付け添えるというのは口語においては普通に日本語で行われているように思われる。

外国人が口にする日本語に接してみても最初を感じるのは、西洋式の論理形式に沿って西洋式 (印欧語流) 文法形式に当てはめた極端な文の定式化である。次の Chomsky (1981) における、日本語の格関係の構造に関する定式化がその典型である：

- (6) (i) [_s NP₁ [_{VP} award NP₂ NP₃]]…英語
 (ii) [_s NP_i NP_j NP_k atae]…日本語
 ((i, j, k) は (1, 2, 3) の順列のいずれかであるとする)

すなわち両言語間の格の抽象的關係は次のようになる：

- (7) NP₁ = GA, NP₂ = NI, NP₃ = O

このように Chomsky は日本語の格助詞 ‘ga’ (主格: NOMinative), ‘ni’ (与格: DATive), ‘o’ (対格: ACCusative) に対しそれぞれ指標を付与して、日本語の文構造における格の位置付けを定式化した一例を示している。動詞 ‘atae (ru) (award)’ が用いられる場合における名詞句 (NP) の割り当ては上のように表示される。ここでいう“日本語”とは、言うまでもなく、いわゆる“理想的な日本語の話者”の話す日本語を指している。Chomsky 理論に従えば、その研究対象とするところ (或いはすべきところ) は周延的、余剰的な部分をそぎ落した、点在する初源的 (primitive) な核文法 (core grammar) をその中核に持つところの言語体系である (但し GB 理論においてはその構築するところは、言語そのものの体系という

よりは、より抽象度の高い、文法体系か)。それを捉えることによって、ある任意の言語を話す大衆を超越した、いわば、“人類の、人類による、人類のための”言語の、普遍文法的側面が浮き彫りにされうるというものである。自然な言語習得においてというよりは、意識的な言語学習においては、明示的な格の形式などに、よりいっそう注意を払いながら文の統語化を図るのは当然のことであろう。しかし日本語の平素の発話においては、しばしば格の形式 (form) 及び定式化 (formulation) が明確でない場合がある：

(8) kanozyo ore kirai

she I(m.) hate

‘I hate her’, ‘She hates me’

※ (m.) = masculine

この文は、英語ならば ‘I hate her’, ‘She hates me’ という二通りの解釈が可能であろう。(音調による識別の可能性もある。) しかしながら次の文は問題を提起する：

(9) ore konozyo kirai

I(m.) she hate

‘I hate her’, ?* ‘She hates me’⁽⁴⁾

この (9) の文の解釈は ‘I hate her’, ?* ‘She hates me’ のように、後者の解釈が困難となり (8) とは平行関係が成り立たず、非対称性 (asymmetry) が生ずる。音調による識別の可能性も考えられない。つまり (9) は日本語の典型的な SOV 構造をなしていて、(8) とは異なり主語と目的語の転換した解釈が困難である。これら二つの例における動作者、被動作者を明確に表現すると以下のようなになるであろう：

- (8)' (i) kanozyo ore no koto (ga) kirai
 she I GEN matter NOM hate
 'She hates what I am'
- (ii) kanozyo no koto (ga) ore kirai
 she GEN matter NOM I hate
 'What she is, I hate' = 'I hate what she is'
- (9)' (i) ore kanozyo no koto (ga) kirai
 I she GEN matter NOM hate
 'I hate what she is'
- *(ii) ore no koto (ga) kanozyo kirai⁽⁵⁾
 I GEN matter NOM she hate
 'What I am, she hates' = 'She hates what I am'

このように、'no koto {GEN (of) CLAUSE (matter, that)}' ('What one is', 'The matter of which~') というマーカーによって被動作者が対象化、あるいは客体化されて統語論上の関係が明確になる（※また 'koto' というマーカーがなくても 'ga' という対象格が基底に存在すると考えられるので括弧で示しておいた。cf. 時枝 (1947), cf. Sugamoto (1982)）が、日本語では口語体、文語体を問わず、先に示した例文のように ϕ (ゼロ) マーカー形式の文やあるいは省略文が非常に多い。日本語の口語体形式は印欧語流の主語、主格、目的語、目的格といった形式カテゴリーで単純に割り振ることができない上、類型論的に日本語を特徴づける能格性も形式的には発達していない。（※但し上の例に関して、'no koto' は目的語を示す役割を果たしているが、'no koto' という形式自体は名詞句であるので目的格を示しているのではない。従って、格助詞ではない 'no koto' を 'マーカー' とするのは妥当ではないかもしれない。）

- | | |
|--|--|
| (8) (i) kanozyo ore kirai
S(3rd) O(1st) V | (8)' (i) Kanozyo <u>ore no koto</u> kirai
S O V |
| (ii) kanozyo ore kirai
O(3rd) S(1st) V | (ii) <u>kanozyo no koto</u> ore Kirai
O S V |
| (9) (i) ore kanozyo kirai
S(1st) O(3rd) V | (9)' (i) ore <u>kanozyo no koto</u> kirai
S O V |
| (ii) ore kanozyo kirai
*O(1st) S(3rd) V | *(ii) <u>ore no koto</u> kanozyo kirai
O S V |

動作者, 被動作者を示すマーカーなし。'no koto' というマーカーによって被動作者, あるいは目的語が明示される。

上で示したように (9 ii) の解釈は成立しない。cf. (9 ii)'

1. 3 分析の対象となりうる言語形式

1.3.1 このように本論では主として, 筆者が日本語教師として携わった経験から得たデータをもとに, 外国人が日本語を学習する上でなかなか到達できないと思われる自然な日本語の口語表現とその構造を指摘して, それに省察を与え, それらの分析を試みようとするものである。従って, しばしば生成文法の分析対象とされるような, 全き日本語ではあるが, 日本語として文法的に可能な適格文, あるいは文法的に不可能な不適格文といった, 理論上構築された形式の文の分析は主眼ではない。英語のようなかなり研究されている言語もさることながら, 生成文法理論を応用した日本語の分析は主に英語の平叙文 (declarative sentence), 肯定文 (affirmative sentence) の調子の文の分析を模倣したものであるだけに, 運用面で様々な機能を果たす形式の分析 (例えば“微妙な”語用論的效果を左右する形式。この“微妙さ”(あるいは“わび”, “さび”に相当するというべきか) というのは敬語に如実に示されるように日本語のコミュニケーション

において重要な役割を果たす。先に述べたように複雑で微妙な対人関係が発達しているためである。) はあまり行われていないように思われる。

(10) kore yat-te kure

this do-CON give

'Give me doing this' = 'Do this for me'

※ CON = connective ⁽⁶⁾

この文はある日本語学習用のテキストに載っていた文である。この表現はたしかに全き日本語である。文法の適格性について全く疑問をさしはさむ余地はない。だが筆者は(私は)このような表現をふざけて(ドラマや芝居で用いられるセリフを真似するような気持ちで)用いるような時以外、使ったことがないように思われる。しかもこれまでの人生で一度も。またこれからも無意識的に、かつヴァナキュラーに用いることはないであろう。では上の表現の代わりにどう表現するのか。

(11) (i) kore yat-te

this do-CON

'Do this'

(ii) kore yat-te kure nai?

this do-CON give not?

'Won't you give me doing this?'

(iii) kore yat-te kureru?

this do-CON give(can)

'Will you give me doing this?'

さらにイントネーションを示すと：

(i)' kore yat-te __/

(ii)' kore yatte kure nai?__／

(iii)' kore yatte rururu?__／

(ii), (iii) は基本的に疑問文で、上昇調 (rising) である。(i) は形式としては疑問文でないにもかかわらず上昇調であるが、(10) に関しては：

(10)' *kore yatte kure __／

(11 i) と同様、疑問文ではないこの形式におけるイントネーションは不適格である。すなわち適格な形式のイントネーションは：

(10)" kore yatte kure —＼

すなわち下降調 (falling) であり断定口調である。つまり命令形なのであるが、意味的機能的にだけでなく形態論的にも動詞の屈折形態は命令形である。こうして分析してくると、場に関して最も自然さの度合いが高いのは (11 i) である。これは文法的な基準を問題にしているのではなく、イントネーションの一致といったような、機能面に観点を置いたものである。命令文で断定の調子を持つ (10) や、疑問文の形式を取り婉曲表現である (11 ii), (11 iii) よりも、日本語の依頼に関する場における表現形式としては (11 i) が最も中立的であるといえよう。

1.3.2 本論の主眼は論理一貫とした言語としての日本語の分析ではない。言語の文法性と論理性は別物である (三上 1963)。日本語には英語を母語とする話者からすれば非論理的であると指摘される表現が様々ある。もちろん論理形式が言語に全く反映されていないわけではなく、(先に挙げた Chomsky による英語と日本語における格の割り当ての定式化参照：GA, NI, O は全き現代日本語における格助詞の形式であり、日本語を理解するには欠かせない、行為者や被動作者を示すマーカーである。) だが言語は論

理性だけでは割り切れないものである。日本語において平素に行われる口語でのやりとりを分析してみると分かる。いささかサイキック (psychic) なことではあるが、日本語には“以心伝心 (from heart to heart)”という言葉があるように、論理的に形式をびしっぴしと並べ連ねなくても言語形式の使用を最小限に留めることによって効果的な (effective and affective) コミュニケーションを円滑にはかるという経済性がある。(例えば照応形 (anaphora) をあまり (殆ど) 用いないことやディスコースにおいて明白な anaphoric な事実や、言語形式は示さなかったり、省略法 (ellipsis <pl. ellipses>) を多用したりすることである。) 一例を挙げると：

(12) zenzen. (全然)

‘Not at all.’

これは中国語 (漢文) (Sino-Japanese) からの借用語であるが、この形式そのものには否定の意味は含まれない。むしろ ‘zenzen’ = ‘at all’ と対応できる。本来なら (論理性に沿って考えるなら) ‘zenzen … nai {at all … Neg.}’ のように否定辞 ‘nai’ を付けなければ、‘not at all’ に相当する表現はできない。英語なら対応形式からもわかるように、‘Not at all’ で省略形であっても否定辞を必ず示している通り論理性を保持している。最小限の省略形であっても否定辞は絶対に省略できない。つまり日本語では ‘at all’ だけで ‘not at all’ が普通に表現できるということである。深層構造を示すと ‘[zenzen [e]]{e: nai (Neg.)}’ と解釈できるが、日本語の場合空の否定辞といかに関係が薄いかは次に示される：

(13)

a. “Don’t you mind if I smoke?” — “Not at all. (= No, I don’t mind at all)”

b. “watasi zyama-zya-nai?” — “zenzen ϕ”

I interrupt-COPULA-Neg. at all

‘Don’t I bother you?’

‘Not at all’

この ‘not’ と ‘at all’ が必然的に二項的に結び付けられるかどうかということとは、後に述べる言語構造の両肢性と単肢性との相違に関する議論と関係がある。

こうした例においては、もちろん言語形式以外の、つまりノンバーバルな認知能力を心理的に働かせることが、日本語の場合はコミュニケーションする上で大きなウェイトを占めているであろうと考えられようが、しかしながらやはりそうした場合に際しても、その場に明確で適した機能的な形式が厳然として存在するはずなのである。まさにそのような言語形式が外国人の日本語学習に際しての論点となりうると主張したいのである。そうした言語形式、つまり日本人がいくら“以心伝心”やら形式使用の極端な最小努力の経済性をはかるとはいえ、その『最小努力の経済性』をすら示す形式があることを、日本語学習／習得に際して把握すべきである、ということが筆者のほんとうの“願い”でもある。(そうすればなるべく違和感を与えない日本語への接近が図れることであろう。) 上の例でいえば“‘not’は加える必要はない”という形式である。そうした自然な言語事実をマスターすることによって、言語学習(バイリンガリズムやトリリンガリズムにおける言語の“獲得”とは言わずもがな異なる。)がより適切で自然な日本語に接近できると考える。要するにある言語への最大の度合の接近は模倣である。だが模倣は模倣のまま終ってはいけない。模倣だけでは際限なく生み出されうる文には対応できない。生成文法は論理形式(logic form)の存在をかなり重要視しているが、実際の言語使用にあたっては論理性もさることながら、自然な用法に接近するには「効用」(すなわち機能性)をもたらし、(しかも、不自然な「効用」形式では「効用」たりえない。従ってなるべく無標(unmarked)の効果をもたらし「効用」形式でなければならない。ここではそうした諸形式をいくつも挙げつらって取り扱うことはできないが、そうした自然な「無標効果」をもたらし日本語の形式につい

て、本論では主として動詞の諸形態を中心に取り上げて見ていくことにする。

注

- (1) 抜粋は筆者
- (2) 同上
- (3) CL = clitics: ロマン系言語などにおけるいわゆる接語 cf. Kayne (1975) etc.
- (4) アステリクス及び'は脚注の文そのものではなく、解釈が不適であることから'の前に付しておいた。
- (5) (9 ii)'の前のアステリクスに関しても注4に同じ。
- (6) yat-te: do-CON (connective) の分析は Clancy ed. (1993) に従った。なお Golovnin (1986) では CON に相当する成分を、ロシア語で分詞の役割を果たす形態である副動詞の屈折形態素に相当するものとして分析している。

参考文献

- Akatsuka, N and P. Clancy (1991), *Conditionality and Deontic Modality in Japanese and Korean: Evidence from the Emergence of Conditionals. in Japanese/Korean Linguistics Volume 2.* ed. Patricia M. Clancy. (1993) Stanford University.
- Akmajian, A., R. Demmers, A. Farmer and R. Harnish (1990), *Linguistics: An Introduction to Language and Communication.* Third edition. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Alfonso, A. (1980), *Japanese Language Patterns.* Volume 2. Sophia University L. L. Center of Applied Linguistics, Tokyo.
- Association for Japanese-Language Teaching (1990), *Japanese for Busy People I, II.* Kodansha International, Tokyo and New York.
- Bally, C. (1935), *Le Langage et la Vie.* Nouvelle Édition Revue et Augmentée. Librairie E. Droz.
- Bloomfield, L. (1933), *Language.* Henry Holt and Company.
- Brown, D. M. (1987), *An Introduction to Advanced Spoken Japanese.* アメリカ・カナダ大学連合 日本研究センター
- 千野栄一 (1992) 『非インド・ヨーロッパ語の研究』 cf. 宮岡伯人 [編] 『北の言語: 類型と歴史』 三省堂
- Chomsky, N. (1965), *Aspects of the Theory of Syntax.* Cambridge, Mass.: MIT Press. 安井稔 (訳) (1970), 『文法理論の諸相』 研究社
- , M. Halle (1968), *The Sound Pattern of English.* MIT Press.
- (1981), *Lectures on Government and Binding.* Dordrecht: Foris. 安井稔・原口庄輔 (訳) (1986) 『統率・束縛理論』 研究社
- (1986), *Barriers.* Cambridge Mass.: MIT Press.

- Comrie, B. (1989), *Language Universals and Linguistic Typology*. Second edition. The University of Chicago Press.
- Cruttenden, A. (1986), *Intonation*. Cambridge University Press.
- Ellis, R. (1985), *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- Firth, J. R. (1957), *Papers in Linguistics 1934~1951*. Oxford University Press.
- Frei H, (1929), *La Grammaire des Fautes*. Slatkine Reprints Genève (1971).
- Golovnin, I. V. (1986), *Grammatika Sovremennogo Japonskogo Jazyka*. Izdatel'stvo Moskovskogo Universiteta.
- 橋本萬太郎 (1981)『現代博言学』大修館書店
- 服部四郎 (1951)『音声学』岩波全書
- 今村義孝 [編] (1980)『日本歴史地名大系第五巻 秋田県の地名』平凡社
- Iordan, J. and J. Orr (1937), *An Introduction to Romance Linguistics*. Methuen & Co. Ltd. London
- Jacobsen, W. M. (1992), *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Kurosio Pubrishers.
- Kayne, R. (1975), *French Syntax*: Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 見坊豪紀 [主幹] (1992)『三省堂国語辞典 第四版』三省堂
- 金田一春彦 (1988)『日本語 新版(上)・(下)』岩波新書
- 河野六郎 (1989)『日本語 (日本語の特質)』cf.『言語学大辞典 第2巻 世界言語論(中)』亀井孝・河野六郎・千野栄一 [編] 三省堂
- Kuno, S. (1973), *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 久野 柴谷 [編] (1989)『日本語学の新展開』くろしお出版
- Ladefoged, P. (1982). *A Course in Phonetics*. Second edition. Harcourt Brace Jovanovich, Publishers.
- Lee, Hansol H. B. (1989), *Korean Grammar*. Oxford University Press.
- Matthews, P. H. (1990), *Morphology*. Second edition. Cambridge University Press.
- 三上章 (1963)『日本語の論理』くろしお出版
- Miyagawa, S. (1989), *Syntax and Semantics 22: Structure and Case Marking in Japanese*. San Diego: Academic Press.
- 中島文雄 (1987)『日本語の構造』岩波新書
- 日米会話学院 (1987)『日本語でビジネス会話 中級編』凡人社
- (1989)『日本語でビジネス会話 初級編: 生活とビジネス』凡人社
- Pierrehumbert, J., M. Beckman (1988), *Japanese Tone Structure*. MIT Press.
- Rizzi, L. (1990), *Relativized Minimality*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Sapir, E. (1921), *Language*. Harcourt, Brace and Company. 泉井久之助 (訳)
- 『言語』(1957) 紀伊国屋書店
- de Saussure, F. (1967), *Cours de Linguistique Générale*. Payot, Paris. 小林英

- 夫 (訳)『一般言語学講義』(1973) 岩波書店
 Shibatani, M. (1990), *Languages of Japan*. Cambridge University Press.
 Sugamoto, N. (1982), *Transitivity and Objectivity in Japanese*. in *Syntax and Semantics 15 Studies in Transitivity*. ed. P. Hopper and S. Thompson. Academic Press.
 竹内理三 [編] (1980)『角川日本地名大辞典 5 秋田県』角川書店
 Taylor, J. (1989), *Linguistic Categorization*. Clarendon Press, Oxford.
 時枝誠記 (1947)『国語学原論』岩波書店
 — (1978)『日本文法 口語編』改版 岩波全書
 Tsujimura, N. (1989), *Unaccusative Nouns and Resultatives in Japanese*. in *Japanese/Korean Linguistics*. ed. H. Hoji. (1990), Stanford University.
 角田太作 (1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版
 Whorf, B. L. (1956), *Language, Thought and Reality*. ed. John B. Carroll. Cambridge Mass: MIT Press.

[原修士論文の目次]

1.	序 論	1
1.1	導入	1
1.2	研究分析の理論的要請	3
1.3	分析の対象となりうる言語形式	11
2.	日本語における論理形式・文法形式の問題点	15
2.1	日本語の論理性に関して	15
2.2	日本語学習の際の論理性の理解について	16
2.3	言語類型論的観点	23
3.	日本語の動詞形態のカテゴリーの問題について	26
3.1	導入	26
3.2	一般動詞に関する問題	26
3.3	現在形	28
3.4	進行形	35
3.5	可能形	45
3.6	受動形	59
4.	結 論	67